

# 朝の公園

小川未明

青空文庫



それは、さむいさむい朝あさのことでした。女じよ中ちゆうのおはるは、赤あかいマントをきた、小ちひさいお嬢じようさんをつれて、近ちかくの公こう園えんへあそびにきました。そこはもう、朝あさ日ひがあたたかくてつていたからです。公こう園えんには、ぶらんこがあり、すべりだいがありました。もう子供こどもたちがあつまつて、笑わらったりかけたりしていました。小ちひさいなお嬢じようさんは、ひとりであそんでいました。おはるはベンチこしに腰こしをかけて、もつてきた少しょう女じよ雑ざつ誌しを讀よんでいました。いなかにいるときから、本ほんを讀よむのがすきでありましたので、こちらへきてからも毎まい月げつのお小こづかいの中なかから雑ざつ誌しを買かつて、おしごとのおわつたあととか、ひまのときにはとり出だして、讀よむのを

たのしみにしていたのであります。

いま、おはるは、その雑誌ざっしにのつている、少女しょうじよ小説しょうせつをむ

ちゆうになつて読よんでいました。あわれな家うちがあつて、感かん心しんな

少女しょうじよが病びよう氣きの母は親おやと弟おとうとをたすけてはたらく話はなしが、かいて

ありました。しばらく、雑誌ざっしに目めをおとしてかながえこんでいる

と、ふいになきさけぶお嬢じようさんの声こえがきこえました。おはるは、

はつとして立たちあがりました。見みると、お嬢じようさんはすべりだいか

らどうしておちたものか、泣ないているのです。

「まあ、どうなすつたのですか？」と、おどろいてとんでいきま  
した。

が、おはるがとんでいくよりも先さきに、みすばらしいはんでん着ぎ

「おとこ  
の男がかけよつて、お嬢さんじょうさんをだきおこしてくれました。  
「おお、いい子こ、いい子こ。」といって、その男おとこはなだめていま  
した。」

「ありがとうございます。」と、おはるはお礼れいをいって、

「お嬢さんじょうさん、ころんだのですか、どこか痛いたくつて？」とききます  
と、ちよつとおどろいたばかりとみえて、べつにけがはなかつた  
ようです。

おはるは、安心あんしんしました。そして、さっきの男おとこの人ひとをみると、  
むこうのベンチにもどつて、ゆうべからこうしてじつとしている  
らしく、両腕りょううでをくんでうつむいているのです。

「きつと、とまるところがなかったんだわ。」

おはるは、このごろ、宿やどがなくて公園こうえんで夜よをあかすあわれな人ひとのあることをきいていました。それで、その人ひともそうであろうと思おもったのです。

おはるはお嬢じょうさんをだいて、むこうがわのベンチに腰こしをおろしました。そして思おもいだしたように、ときどき、そのあわれな男おとこのように見みていました。男おとこはそんなことに気きのつくはずもなく、いつまでもじつとしてうなだれていました。

「しごとがないのだろうか？ それとも、年としをとっていて、しごとができないのだろうか？」

いろいろのことを考かんえながら見みまもっているうちに、いつか自分ぶんの父親ちちおやのすがたが、目めにうかんできました。気きのせいかな、あ

「おとこ  
の男のすがたのどこかにお父さんと似たところがあるようです。」

「きようだいもない、子供もない、ひとりものなのかしら？」

そう考えているうちにおはるは、故郷ではたらく両親の

すがたが、まざまざと目に見えるような気がして、この暮れには

なにかお父さんやお母さんのすきそうなものをおくつてあげよう

と思つたのでした。

「さあ、おうちへかえりましょう。そしてまたあとであそびにま  
いりましょう。」といって、おはるはお嬢さんの手をひいて、お  
うちへかえりかけました。

公園の花壇は霜枯れがして、いまは赤く咲いている花も

ありませんでした。けれど、黒いやわらかな土からは、来年さ

く草花くさばなの芽めが、もうぷつぷつとみどり色いろに頭あたまを見せていたので  
す。公園こうえんを出でるとき、おはるはもういちどふりむいて、あのル  
ンペンおとこのような男おとこを見みました。男おとこは、やはり動うごかない置おきもの  
ようしたに下したをむいて、じつとしていました。

ちようどその日ひの、昼ひるごろのことです。おはるがおつかいに出で  
ると、公園こうえんのそばで子供こどもたちが、いまルンペンらしい男おとこが、た  
おれていたのを巡おまわり査ささんがつれていったと話はなしていたので、お  
はるは、もしやさっきお嬢じょうさんをだきおこしてくれたしんせつな  
男おとこではないかと思おもったので、

「あんた、その人ひとを見みたの？」と、子供こどもの一人ひとりにききました。

「見みたよ。はんでん着ぎでみじかいズボンをはいて、黒くろいぼうしを



かぶっていたよ。」と、その子供こどもはいいました。

「まあ！ その男おとこは死しんでしまっていたの？」

おはるは、たしかにさっきの男おとこであるとかわかったら、きゆうあたまに頭あたまの中なかが、かわいそうな気きもちでいっばいになりました。

「さむいのににもたべないので、おなかがすいてたおれたんだつて、巡おまわり査ささんがいつていたよ。だから、死しにはしないだろう。」と、その子供こどもはこたえました。

「どこへつれていかれたの？」

「さあ、どこだか。」

子供こどもたちはすぐにそんなことはわすれてしまったように、たこをあげたり鬼おにごっこをしたっていました。

おはるは、用事をすまして、おうちへかえると、自分がしまつておいたお給金のなかから、五十銭銀貨を一枚とりだしました。そして、紙につつんで交番の巡査さんのところへもつていきましました。

「どうかこれを、公園でたおれたきのどくな人にあげてください。」といつて、さしだしました。

巡査さんはふしぎそうにおはるの顔を見ていましたが、おはるが今朝からの話をしてきのどくでならないからといひますと、  
巡査さんもうなずきながら、

「感心なお志です。たしかにとどけてあげます。どんなに喜ぶかしれませんよ。」といつて、こころよくひきうけてくださいま

した。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

初出：「台湾日日新報」

1935（昭和10）年12月28日

※表題は底本では、「朝《あさ》の公園《こうえん》」となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 朝の公園

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>